



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	児童虐待の背景にある被害的認知と世代間連鎖：実母からの負情動・身体感覚否定経験が子育て困難に及ぼす影響(fulltext)
Author(s)	會田,理沙; 大河原,美以
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 65(1): 87-96
Issue Date	2014-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2309/134597
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

児童虐待の背景にある被害的認知と世代間連鎖

—— 実母からの負情動・身体感覚否定経験が子育て困難に及ぼす影響 ——

會 田 理 沙*・大河原 美 以**

教育心理学講座

(2013年9月13日受理)

1. 問題意識と目的

1. 1 はじめに

度重なる児童虐待防止法の改正やマス・メディアの報道により、児童虐待が注目を集めるようになって久しい。平成23年度には、全国の児童相談所に寄せられた児童虐待相談の対応件数が遂に59,862件となり^{19) 20)}、深刻な社会問題であることが窺える。しかしながら、上記の件数は発見され、児童相談所に報告された件数であり、児童虐待が家庭内に潜在化する特性を持つ現象であることを踏まえると、実際には潜在的な事例が多く存在する可能性が指摘されている^{15) 28) 45) 49)}。そこで、非臨床群をも対象とした潜在的な虐待の実態の把握や発生の要因に関する研究が近年進んできている^{14) 34) 52)}。

本論では非臨床群を対象として、幼少期に虐待を受けていた子どもが、親になったときに自分自身の子どもに虐待をしてしまうという「世代間連鎖」^{6) 14) 27) 29) 30) 51)}の問題を、親が抱える被害的認知の観点から検討する。

まず、本論の背景にある先行研究について、概観しておく。

大河原^{35) 36) 37)}は、感情制御困難な小学生の治療援助の実際を通して、親から負情動・身体感覚を否定される経験が、感情制御の脳機能の健全な育ちの発達を困難にすることを指摘し、子どもの負情動・身体感覚を承認するコミュニケーションの回復によって、感情制御の力の育ちを保障することが可能であることを、論じてきた。また、臨床実践から導きだされた仮説を検証するために、母からの負情動・身体感覚否定経験が、解離や自傷行為⁹⁾、家庭内暴力⁵⁾に及ぼしている

影響について、実証的に検証してきた。さらに、負情動・身体感覚否定経験がなぜ感情制御の育ちを困難にするのかについて、感情制御の脳機能の観点から、理論的に説明してきた^{38) 39)}。その中で、乳幼児期の母子のコミュニケーションにおいて、母が子の負情動・身体感覚を否定するに至る相互作用を脳機能の点から「愛着システム不全の仮説モデル」として、図式化した(図1)。

本論は、図1のモデルを土台にして、実母からの負情動・身体感覚否定経験が、世代間連鎖にどのように影響するのか、被害的認知に注目することを通して、研究するものである。

「愛着システム不全の仮説モデル」では、情動を司る辺縁系領域と、認知機能を司る皮質領域にわけて、母子の相互作用を図式化している。子の辺縁系領域(扁桃体)において生体防御反応としての負情動が喚起されると、子は情動性発声(泣き声やぐずり)に

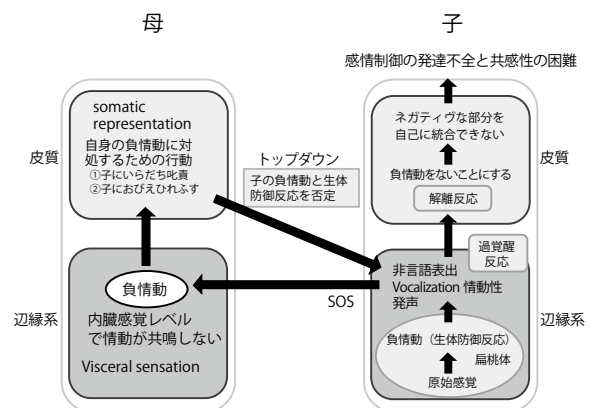


図1 愛着システム不全の母子相互作用に関する仮説モデル (大河原, 2011)

* 杉並区子ども家庭支援センター (166-0004 阿佐谷南1-14-8)

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

よって自己のSOSを母に伝える。子の泣き声やぐずりに、母は自身の辺縁系（内臓感覚レベル）で共鳴し、子が求める安心を与えるため、皮質において、子の負情動を言語化し、抱きしめる。そのような関わりが、健全な愛着システムであり、内臓感覚レベルでの共鳴は、いわゆる情動調律⁴³⁾をさしている。しかしながら、愛着システム不全が起こるときには、子から発せられる生体防御反応としての負情動によって、母の内臓感覚に不快が生じ、負情動が喚起されてしまう。そのため、子のSOSの訴えに対して適切な情動調律が行なわれず、母は自身の辺縁系を支配している負情動を制御するために必要な行動をとることになるので、結果として、生体防御反応としての子の負情動・身体感覚を否定することになる（図1）。虐待的な養育環境においては、体罰や叱責、無視や否定といった形で子どもの負情動・身体感覚が否定される関わりが生まれている³⁹⁾。そのような不適切な関わりが、子どもの感情制御の発達に困難を与えることになるのである。感情制御に困難を抱えたまま成人すると、わが子への怒りを制御できずに虐待してしまう可能性が生じることになる。

子どもの情緒的な信号に共感的に応答することが困難な親や、虐待傾向のある親の特徴として、子どもの泣きを聞くと、「苦悩や欲求不満、動悸の高進などの不安反応を示す」²⁷⁾「不安、憎しみ、怒りやいら立ちといった複雑な情緒を抱く」⁴⁸⁾といった報告がある。鶴飼⁴⁸⁾も、幼少期、自分自身の泣きに対して実母から応えてもらえなかった経験があると、わが子の泣き声が無意識的に、悪い記憶や母親自身の負情動、不快感呼び起こすと述べている。これらの報告は、子どもの泣きやぐずりによって母親の辺縁系レベルで、負情動やネガティブな身体反応が生じていることの例であるといえるだろう。

つまり虐待の世代間連鎖の背景には、「泣きに対する情動調律の困難の連鎖」という現象、すなわち母自身が負情動・身体感覚を承認されなかったことによって、わが子の負情動・身体感覚を承認できないという現象が起こっている可能性が考えられるのである。

1. 2 被害的認知

近年、虐待を促進する要因として、また、虐待の世代間連鎖の背景にある親の心理的特徴として「被害的認知」に関する研究が注目されている^{24) 25) 29) 30) 31) 44)}。「被害的認知」とは、「泣きやまない、自己主張する、親の言うことを聞かない」などの乳幼児の様々な反応を、自分に対する攻撃・非難と捉えたり、「その行動

の裏に私に対する敵意がある」と感じたり、「私を困らせる、否定している行為だ」などと捉える親の認知のことである^{25) 27) 29) 30) 31)}。

西澤^{27) 29)}によると、被害的認知が生じる背景には、以下のような世代間連鎖の問題があるという。虐待を受けた子どもは、「自分は悪い子」という低い自己評価と「他者は自分を責め、自分を傷つける存在」という他者イメージを持つようになり、「誰も自分のことをかまってくれない」「いつも自分ばかりが損をしている」という被害感を持つことになる。そのような体験をして育った人は、親になったとき、「泣きやまない」「言うことを聞かない」などのわが子が思い通りにならない場面で、子どもが自分を「わざと困らせようとしている」「バカにしている」「ダメな親だと思っている」などの被害感・被害的認知が生じ、子どもに対して怒りや苦痛を感じてしまうという。

大河原³⁹⁾の愛着システム不全モデル（図1）においては、子どもの泣き・ぐずりをキャッチする母親の脳内での情報処理という観点から、被害的認知が生じる理由を説明することができる。すなわち、母親が子どもの不快感情の表出（泣き、怒り、ぐずぐず、かんしゃく等）に直面して、辺縁系レベルにおいて不快感が湧いてきた際に、その不快を治めるために子どもの泣きに対して皮質レベルで認知的な解釈が加えられ、被害的認知が生じるのではないかと推測することが可能である。その結果、子どもを攻撃したり、無視したりするという虐待的行動に陥ってしまうのである^{25) 29) 30) 31)}。

1. 3 虐待・子育て困難の維持要因

そのほか、虐待・子育て困難の背景にある問題維持要因としては、「育児不安」や「自尊感情の低さ」に注目する必要がある^{16) 17) 18) 25) 34) 46)}。

「育児不安」とは、「育児の中で感じられる疲労感や気力の低下、イライラ、不安、悩み等が解消されず蓄積されたままになっている状態」、「子どもや子育てに対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」と定義されている²¹⁾が、虐待のリスク要因としてだけではなく、被害的認知を促進する要因としても、注目されている²⁵⁾。

育児不安は、子どもの気質とも関連がある。気質的に扱いにくい子どもの場合、母親は、子育てを困難に感じ、時間やエネルギーを多くとられて、育児に対して自信喪失し、負担感が増し、育児のために自分自身の行動が著しく制約されていると感じやすい²²⁾。この知見をもとに、輿石^{16) 17) 18)}は、「統制不能感」という概念に着目して育児不安との関連を検討した。統制不能感とは、例えば、なだめているのに、なかなか泣き

やまない子どもをあやしている時、母親が子どもの泣きに対して「自分の手には負えない」「コントロールすることができない」という感情を抱くことである。輿石¹⁶⁾ 17) 18) によると、統制不能感が高い母親は育児不安も高いということが明らかになっている。

一方、自尊感情は、育児不安や被害的認知を抑制する要因であることが、これまでに確認されている^{17) 25)}。しかし、虐待を受けた子どもは「自分が悪いから虐待を受けた」と虐待の理由を自己に原因帰属させる傾向があり、「自分は悪い子」という自己イメージを持っている。そのため、自己に対する認知の歪みがあり、自己評価や自尊心が低い傾向にあると言われており^{12) 26) 27)}、被虐待経験のある母親の場合、自尊感情が低い可能性が考えられる。

1. 4 目的

本論では、乳幼児を育てている母親が「被害的認知」「育児不安」「統制不能感」「低い自尊心」などを抱えた状態を、子育て困難状態と捉えて、研究を進める。また、非臨床群の母親を対象とした研究であるため、原家族での経験を「虐待」体験ではなく「ネガティブな被養育経験」として把握する。

本論の目的は、母親自身のネガティブな被養育経験（負情動・身体感覚否定経験）が、自尊感情、育児不安、被害的認知、「子どもをコントロールできない」という感覚（統制不能感）にどのような影響を与えているのかを実証的に明らかにすることである。図2に仮説を示した。本論では、この仮説を実証し、その結果から、被害的認知と世代間連鎖のメカニズムについて考察する。

2. 方法

2. 1 被害的認知質問紙の作成（予備調査）

西澤・屋内³¹⁾ と中谷・中谷²⁵⁾ が被害的認知質問紙を作成しているが、本論の背景にある愛着システム不全モデル（図1）の観点からみた被害的認知を測定するために、表1に示した手順で新たに作成した（項目

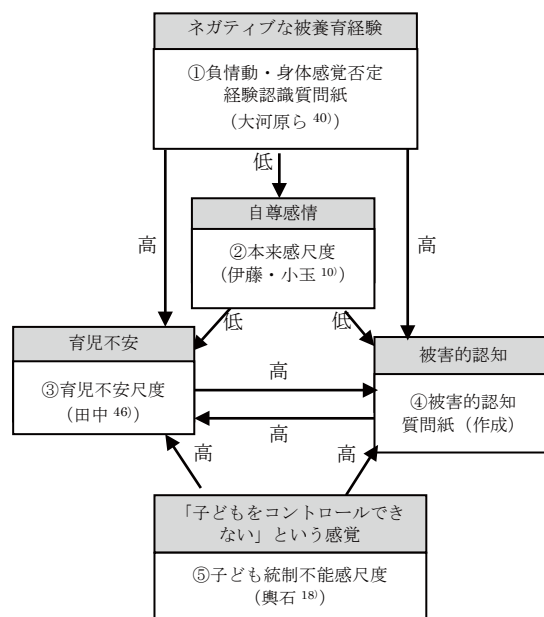


図2 仮説図

は表2参照)。

2. 2 仮説の検証（本調査）

2. 2. 1 調査対象者および方法

都内の保育園に子どもを預けている母親1160人。都内4市区町村に事前に調査依頼を行い、12保育園にて調査を行った。まず、保護者あての手紙と質問紙を入れた封筒を各園に配布し、保育士に配布回収をお願いした。その後、各園から直接回収した。

2. 2. 2 調査時期

2012年8月31日~10月29日

2. 2. 3 質問紙構成

フェイスシートには、母親の年齢、子どもの年齢・性別、家族構成、就労状況の記入を求めた。

①負情動・身体感覚否定経験認識質問紙（大河原ら⁴⁰⁾）

負情動否定経験（5項目）と身体感覚否定経験の（8項目）2因子で構成される質問紙。母親に対して、負情動と身体感覚を表出した場面でどの程度受け入れてもらうことができなかったかを測定する。負情動に関しては「私に不機嫌に不安を訴えると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった（だろ

表1 予備調査の概要

	調査時期	調査対象者
予備調査①：質問項目作成のための自由記述調査	2012年7月6日～7月16日	都内の0～6歳の乳幼児を持つ母親7名
予備調査②：因子妥当性と信頼性の確認のための質問紙調査	2012年7月28日～8月21日	都内の都立公園9箇所遊びに来ていた1～6歳の子を持つ母親112名、1～6歳の子を持つ知人17名の計129名

う)」などの5項目(怒る・泣く・ぐずぐず・イライラ・不安を訴える), 身体感覚に関しては「私が『おなかが痛い』と感じていて, 母は私(あなた)のおなかが痛いとは感じていない時, 私が『おなかが痛い』と言うと, 母は『そんなことはない。おなかなんて痛くないでしょ』と言った(だろう)」などの8項目(いやなおい・変な味・気分が悪い・おなかが痛い・ねむい・暑い・熱っぽい・足が痛い)からなっている。回答は, 「全く思わない」から「非常にそう思う」の5件法で求めている。

②本来感尺度(伊藤・小玉¹⁰⁾)

自尊感情については, 外的な基準上で高いパフォーマンスを達成することで得られる自尊感情である「随伴性自尊感情」(=不適応的自尊感情)と, 自己価値の感覚が社会的な成功や失敗などの外的根拠に依存しておらず, 自分が自分自身でいられることから自然に得られる本当の自尊感情(=適応的自尊感情)の二つがあるとされている⁴⁾。興石¹⁸⁾は, 母親の基準が自分の外にあり, 外的な基準上で十分なパフォーマンスが達成されないと, 育児不安が増加し, 自尊感情が低下する可能性を指摘している(ex.「子どもに対して, 言うことを聞かせられない自分はダメ」など)。以上を踏まえると, 本論では「随伴性自尊感情」ではなく, 「適応的な最良の自尊感情」である「自己本来感」^{10) 11)}を測定することが必要となる。よく知られているRosenberg⁴¹⁾の自尊感情尺度はそれらを弁別せずに測定している可能性が示唆されている^{4) 13)}ため, 伊藤・小玉^{10) 11)}がその問題点を踏まえて「最良の自尊感情」を測定するために作成した「本来感尺度」を本論では使用する。「自分のやりたいことをやることができる」, 「いつでも揺るがない「自分」を持っている」などの7項目からなり, 回答は「あてはまらない」から「あてはまる」の5件法で求めている。

③育児不安尺度(田中⁴⁶⁾)

子育てに対する漠然とした不安, 疲労感, 子育てに対する自信の持てなさを測るものである。「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う」, 「子どものことで, イライラすることがある」, 「この子がうまく育つかどうか不安になることがある」などの10項目に対し, 「まったくない」から「よくある」の4件法で回答を求めている。

④被害的認知質問紙(表2)

筆者が予備調査(表1)を通して作成した質問紙。子どもが反抗する場面・グズグズしたり泣いたりする場面・自己主張する場面に直面した際に, 母親自身がどれほどその行為から「被害感」を持つのかを測る質

表2 被害的認知質問紙の因子分析結果

	I
3 子どもがグズグズ言うのは, 私のことがあまり好きではないからでは, と感じる	.854
5 子どもが泣きやまないと, 子どもに「ダメな親だ」と評価されているように感じる	.780
4 子どもがわがママを言うのは, 子どもが私のことを尊敬していないからだと感じる	.780
2 子どもを寝かせようとしてあやしても, 子どもが寝ないと, 子どもに「私のあやし方が悪い」と言われているような気になる	.607
1 私が片付けた物を子どもがすぐ散らかす時, 子どもに馬鹿にされたような気がする	.580
	累積寄与率 53.01%
	a 係数 .821
因子抽出法: 主因子法	

問紙である。全5項目(表2)に対して, 「全くあてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらでもない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5件法で回答を求めた。

⑤子ども統制不能感尺度(興石¹⁸⁾)

「泣き」と「ぐずり」の場面に焦点を当て, 母親の子どもへの統制不能状況の程度を測定するものである。「はっきりした理由もないのに, 泣いて(ぐずって)困ることがある」「気に入らないことがあると, そっくりかえって怒り(泣き), なかなかおさまらないことが多い」などの5項目に対し, 「決してそうではない」から「全くその通り」の5件法で回答を求めている。

3. 結果

3.1 被害的認知質問紙の作成

表1に示した予備調査①で得られた自由記述回答を踏まえ, 計10項目から成る質問紙を作成した。予備調査②にて, 主因子法による因子分析を行った結果, 3因子構造が確認されたが, 本論では, 被害的認知を1因子として扱うため, 第1因子に高い負荷を示さなかった5項目を削除した。残った5項目について, 再度主因子法による因子分析を行った結果, 1因子構造が確認された。本調査において再度, 5項目から成る被害的認知質問紙について, 主因子法による因子分析を行った結果, 1因子構造が確認された(表2)。

3. 2 既成の質問紙の信頼性・妥当性の確認

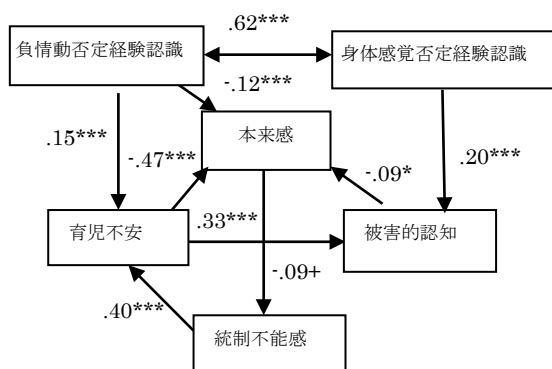
先行研究と同様に、①負情動・身体感覚否定経験認識質問紙は2因子、②本来感尺度は1因子、⑤子ども統制不能感尺度は1因子となり、いずれも十分な信頼性が得られた。③育児不安尺度に関しては、項目5「子育てのために、毎日毎日同じことのくり返ししかしていないと思う」の因子負荷量が低かったため削除した。因子構造は先行研究と同様に、1因子であった。

3. 3 仮説の検証

有効回答数543部、有効回答率46.81%、母親の平均年齢は35.98歳(22~47歳)、子どもの数は平均1.84(1~5人)であった。

構造方程式モデリングによるパス解析を行った結果、適合度指標はGFI=.988, AGFI=.959, RMSEA=.049, AIC=93.843であり、十分な妥当性があるといえる(図3)。負情動否定経験認識から育児不安に、身体感覚否定経験認識から被害的認知に有意な正のパスがひかれた。また、負情動否定経験認識から本来感へと有意な負のパスがひかれ、本来感から統制不能感へと有意傾向の負のパス、統制不能感から育児不安へと有意な正のパス、育児不安から本来感への有意な負のパス、育児不安から被害的認知へ有意な正のパス、育児不安と被害的認知から本来感へ有意な負のパスがひかれた(図3)。

すなわち、負情動否定経験認識が育児不安を高め、育児不安が被害的認知を高めると同時に、身体感覚否定経験認識は直接、被害的認知を高めるといったことが明らかになった。また、負情動否定経験は、本来感を低下させ、本来感の低さが統制不能感を高め、統制不能感が育児不安を高め、育児不安が被害的認知を高め、被害的認知と育児不安が本来感を低めるといった悪



$\chi^2=29.843, df=13, p=.005$
 GFI=.988, AGFI=.959, RMSEA=.049, AIC=93.843
 + $p<.10$, * $p<.05$, *** $p<.001$
 誤差項は省略

図3 パス解析結果

循環が示された。以上の結果から、仮説は検証されたといえる。

3. 4 被害的認知あり群となし群の比較

被害的認知は非常に特殊な認知の仕方であり、本調査のデータにおいても、5つの認知を尋ねる質問に対し、全て「あてはまらない」を選択したものが大多数を占めていた。そこで、質問項目5つのうち、1つでも「どちらでもない」「ややあてはまる」「あてはまる」を選択した調査協力者を「被害的認知あり群」として抽出したところ、全体のうちの22.9%(125名)が該当した。

被害的認知あり・なしを独立変数、母親の年齢、第一子の月齢、負情動否定経験認識、身体感覚否定経験認識、本来感、統制不能感、育児不安を従属変数として、t検定を行った。その結果、負情動否定経験認識、身体感覚否定経験認識、本来感、統制不能感、育児不安において有意な差がみられた。母親の年齢や子の月齢とは関係しなかった(表3)。

以上の結果はすなわち、被害的認知のある母親の方が負情動・身体感覚否定経験認識が高く、本来感が低く、統制不能感、育児不安が高いことを示している。

4. 考察

パス解析の結果(図3)より、仮説(図2)は検証された。また、被害的認知あり群となし群の比較により、被害的認知あり群は明らかに子育てがハイリスクであることが示された。

表3 被害的認知あり群となし群のt検定結果

	なし群 (N=418)	あり群 (N=125)
負情動否定経験認識 (5~25点)	9.92	< 11.94*** (t(183.08)=3.949)
身体感覚否定経験認識 (8~40点)	14.28	< 16.98*** (t(543)=4.827)
本来感 (7~35点)	23.69	> 20.17*** (t(544)=6.547)
統制不能感 (5~25点)	12.63	< 14.33*** (t(544)=4.436)
育児不安 (9~36点)	21.74	< 25.34*** (t(544)=7.691)
母親の年齢	35.83	35.78 ^{ns} (t(407)=.092)
第一子の月齢	69.36	71.31 ^{ns} (t(534)=.449)
*** $p<.001$		

4. 1 母自身の身体感覚否定経験がわが子への被害的認知を強める理由

実母から自身の負情動の表出(怒り, 泣き, ぐずぐず, イライラ, 不安)を否定された経験は, 子育てに対する漠然とした不安, 疲労感, 子育てに対する自信のなさ(子育て不安)を高めることが分かった。一方, 実母から自身のネガティブな身体感覚(いやなおい, 変な味, 気分の悪さ, 腹痛, 眠気, 暑さ, 熱っぽさ, 足の痛み)を否定された経験は, 子どもが反抗・自己主張する場面・グズグズしたり泣いたりする場面に直面した際に, 子どもの行動から「被害を受けた」と感じる被害的認知を高めることが分かった。

この結果について, 脳機能との関連から考察する。

負情動(怒り, 泣き, ぐずぐず, イライラ, 不安)の発現には, 感情を司る大脳辺縁系, 特に扁桃体が深く関与している^{42) 50)}。一方, 生体防御反応としての身体感覚³⁰⁾は痛覚, 内臓感覚, 味覚, 嗅覚といった原始感覚⁸⁾を指し, これらの感覚は, 生命活動の中枢である脳幹や, ホメオスタシス(命を脅かすような変化が起きないように, また起きたとしても直ちに修正されるように自動的に体温や水分, 血圧, 内臓機能などの恒常性を維持する)の中枢である視床下部に由来すると言われている^{1) 2) 23) 42)}。坂井・久光⁴²⁾は, 情動とそれに伴う身体反応(本研究では負情動と身体感覚)の流れを次のように説明している。大脳皮質で処理された感覚情報が辺縁系に届けられ, 快・不快などの評価が行われる。その後, 辺縁系での情動評価は視床下部・脳幹へと送られ, その結果, 情動行動が生まれてくる。視床下部は, 本能行動や内臓機能の調節, 内分泌反応(筋肉の緊張や心拍数・血圧の上昇など)を喚起し, 脳幹は情動にともなう行動表出や身体反応, 情動行動(笑う, 泣く, 暴れるなど)を引き起こす。

このような脳の機能を勘案すると, 負情動を否定される経験は, 辺縁系での情動評価を否定される経験であり, 身体感覚を否定される経験は, 視床下部や脳幹レベルの本能的な反応を否定される経験であるといえる。

人は一般に, 生命を脅かされるような危険な状況に直面した際, ノルエピネフリンなどのアドレナリン(神経伝達物質)が放出され, 闘争—逃走反応と言われる生体防御反応が生じると言われている。これらの神経伝達物質は, 脳幹の中の青斑核から分泌されている^{1) 2) 50)}。ノルエピネフリンが脳内にみなぎると, 警戒心が起こり, 危険に対処しよう心が鋭敏になり, 心拍数と血圧の増大, 筋肉の緊張などが起こり, 生命への脅威に応答する(=闘争—逃走反応)ことができるようになる^{1) 42)}と言われている。この闘争—逃走反

応は, 辺縁系や脳幹が司っていると言われているが, 特に脳幹は, 闘争—逃走反応の最終的な実行部位であると位置づけられている^{3) 23)}。また, セロトニンはノルエピネフリンの反応性と覚醒レベルを調整するが, セロトニンの活性が低下すると覚醒レベルの調節ができなくなり, 攻撃性が強くなることが知られている。具体的には, 過度の易刺激性, 興奮性, 過敏性, 敵意, 衝動性の増加・攻撃性の爆発, 自己に向けられた攻撃性などの行動が見られ, PTSDを発症した患者の特徴としてもセロトニン活性の減少が確認されている^{42) 50)}。このセロトニンの核も, 脳幹に位置している^{2) 42)}。

以上のことから, 幼少時に生体防御反応としての身体感覚を否定された経験を多くもっている母親は, 脳幹の否定という経験の反復により, 通常は脅威と感じないような刺激であっても, 脅威と感じてしまうような易刺激性を脳幹に抱えており, 闘争—逃走反応を起こしやすい可能性が考えられる。そのため, わが子の泣き声やぐずりの刺激によって, 本能的な脳幹のレベルで脅威を感じ, 闘争—逃走反応が喚起されているために, 皮質レベルで被害的認知が生じる可能性を推測することは, 妥当であろうと考えられる。ここに世代間連鎖のメカニズムをみることができる。図1に即して, 被害的認知が生じる状況を図式化したものが図4である。

4. 2 本来感(自尊感情)の役割

パス解析(図3)の結果から, 負情動否定経験認識は, 本来感(自尊感情)を低下させることが示された。そして, 本来感の低さが統制不能感を高め, 統制不能感が育児不安を高め, 育児不安が被害的認知を高め, 育児不安と被害的認知が本来感を低め…という各要因の悪循環が明らかになった。

ネガティブな被養育経験(本論では負情動否定経験・身体感覚否定経験)が, 自尊感情を低下させるという

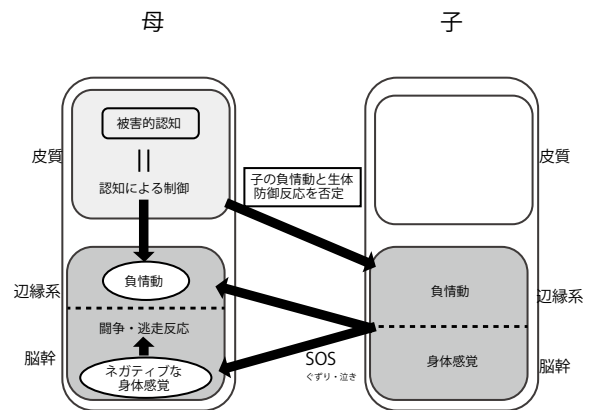


図4 被害的認知が発生する背景

結果は、臨床的な観点からも報告されている^{12) 26) 27)}。また大原³⁴⁾は、自尊感情や自信、評価の低い親は「泣く」「言うことを聞かない」などの子どもの行動を親への非難と認知し、子どもの行動を制止できないなど、育児に対して混乱を生じる事が多いことに言及している。本間⁷⁾も、育児に戸惑い落ち込み、自分の育児に自信が持てなかったり、不安を持っていたりする母親は、低い自己評価を抱いていると述べている。このように臨床経験されてきている事象を、本結果は実証したといえる。

本結果は、支援の際に、現在の母の自尊感情を支えていくことがきわめて重要だということをも意味するものである。

もしも、被害的認知をもつ母の訴えを聞いた支援者が、母親として失格であると判断するとしたら、そのような関わりをされることによって、さらに母の自尊感情が低下することになり、支援者自身もこの悪循環に加担してしまうことになるだろう。

支援者には、母親の自尊感情を回復させるような関わりが求められる。奥山³²⁾は、虐待者を罪人として扱ったり裁くようなことはせず、虐待をしてしまったことによる罪悪感に共感する態度で臨むこと、立松⁴⁷⁾は、子育ての困難さや不安、虐待をせざるを得なかった状況を受け止めることの重要性を述べている。子どもや育児に対してどんな気持ちを抱いていても、批判せず受け止め^{7) 33)}、子育て中の怒りやイライラ、悲しみや寂しさに共感し、理解を示すような対応³³⁾が必要である。これらの対応によって親は、自己評価を高める、安心感や自信を得る、子どもへの対応を振り返るゆとりが生まれる、“自分の感じ方”を尊重されていることを実感し、安心感を得られるなどの効果が報告されている^{32) 33) 47)}。

被害的認知は、母のSOSのサインであると言える。そのサインに気付いた時には、母親に寄り添い、不安や怒りなどのネガティブな気持ちに共感することで母親の自尊感情を回復させる。ここで生まれる変化が母親の中の悪循環を断つ、支援の第一歩となるのである。

付記

本稿は第2執筆者の指導の下に、第1執筆者が東京学芸大学大学院修士論文(平成24年度)として提出したものをまとめ直したものである。調査にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Bremner, J. D. 著, 北村美都穂訳: ストレスが脳をだめにする, 青土社, 2003
- 2) Damasio, A. R. 著, 田中三彦訳: 無意識の脳 自己意識の脳—身体と情動と感情の神秘, 講談社, 2003
- 3) Damasio, A. R. 著, 田中三彦訳: 感じる脳, ダイアモンド社, 2005
- 4) Deci, E. L., & Ryan, R. M.: Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum, 31-46, 1995
- 5) 福泉敦子・大河原美以: 母からの負情動・身体感覚否定経験が攻撃性に及ぼす影響—家庭内暴力傾向との関係—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 64, 179-188, 2013
- 6) 林裕美・横山恭子: ネガティブな被養育経験をもちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について—一負の世代間伝達を断ち切るために—, 上智大学心理学年報, 34, 33-42, 2010
- 7) 本間博彰: 児童虐待と親の問題—ハイリスクマザーと治療的アプローチを中心に—, 児童青年精神医学とその近接領域, 43 (4), 389-394, 2002
- 8) 福土審: 原子感覚による情動の生成とその破綻, 医学のあゆみ, 232 (1), 3-6, 2010
- 9) 猪飼さやか・大河原美以: 母からの負情動・身体感覚否定経験が自傷行為に及ぼす影響—解離性体験尺度DES IIとの関係—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 64, 171-178, 2013
- 10) 伊藤正哉・小玉正博: 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討, 教育心理学研究, 53, 74-85, 2005
- 11) 伊藤正哉・小玉正博: 大学生の主体的な自己形成を支える自己勘定の検討—本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して—, 教育心理学研究, 54, 222-232, 2006
- 12) 伊東ゆたか・犬塚峰子: 児童虐待—社会的養護の中にある子どもの情緒行動上の問題と予後, 犯罪学雑誌, 71 (6), 183-198, 2005
- 13) Kernis, M. H.: Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26, 2003
- 14) 木本美際・岡本祐子: 母親の被養育経験が子どもへの養育態度に及ぼす影響, 広島大学心理学研究, 7, 207-225, 2007
- 15) 小林登: 児童虐待および対策の実態把握に関する研究(総括研究報告書), 厚生科学研究費補助金 総合的プロジェクト研究分野 子ども家庭総合研究事業, 2004

- 16) 輿石薫:新生児期から生後4か月までの子どもの気質の安定性と母親の育児不安—母親の自己注目傾向の違いから—, 小児保健研究, 61 (3), 482-488, 2002
- 17) 輿石薫:育児不安に影響を与える要因についての縦断的研究—予期不安尺度と期待感尺度の作成—, 小児保健研究, 61 (4), 686-691, 2002
- 18) 輿石薫:育児不安の発生機序と対処方略, 風間書房, 2005
- 19) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局:児童家庭福祉の動向と課題, 2012
- 20) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局:「子ども虐待による死亡事例等の検証結果(第8次報告の概要)及び児童虐待相談対応件数等」社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会, 2012
- 21) 牧野カツコ:乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>, 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56, 1982
- 22) 水野里恵:乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連:第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究, 発達心理学研究, 9 (1), 56-65, 1998
- 23) 中尾弘之:情動よりみた脳幹情動系と辺縁系の関係, 精神身体医学, 14, 394-399, 1974
- 24) 中谷奈美子・本城秀次・村瀬聡美・金子一史:母親の防衛スタイルと虐待的行為の関係, 心理臨床学研究, 24 (6), 675-686, 2007
- 25) 中谷奈美子・中谷素之:母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響, 発達心理学研究, 17 (2), 148-158, 2006
- 26) 西出隆紀・中村紗也香:虐待的なしつけが子どもの対人関係に与える影響について—一般家庭群と被虐待児群との比較から—, 愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部篇—, 創刊号, 45-61, 2001
- 27) 西澤哲:子どもの虐待—子どもと家族への治療的アプローチ, 誠信書房, 1994
- 28) 西澤哲:子ども虐待の社会的病理—虐待の文化的文脈—, 日本精神科病院協会雑誌, 23, 644-649, 2004
- 29) 西澤哲:子ども虐待と反発性, 乳幼児医学・心理学研究, 18 (2), 129-137, 2009
- 30) 西澤哲:しつけと虐待の境目—親による体罰を考える, 児童心理, 64 (13), 1122-1127, 2010
- 31) 西澤哲・屋内麻里:平成17年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業), 児童福祉機関における思春期児童等に対する心理的アセスメントの導入に関する研究, 分担研究報告書, 虐待的行為につながる心理的特徴について:虐待心性尺度(Parental Abusive Attitude Inventory: PAAI)の開発に向けての予備的研究, 2006
- 32) 奥山真紀子:被虐待児の治療とケア, 臨床精神医学, 26 (1), 19-26, 1997
- 33) 尾上明日香:乳幼児の母の子育て困難と負情動否定認識との関係, 東京学芸大学修士論文, 2009
- 34) 大原美和子:母親の虐待行動とリスクファクターの検討—首都圏在住で幼児をもつ母親への児童虐待調査から—, 社会福祉学, 43 (2), 46-57, 2003
- 35) 大河原美以:親子のコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に与える影響—「よい子がきれる」現象に関する試論—, カウンセリング研究, 37, 180-190, 2004
- 36) 大河原美以:怒りをコントロールできない子の理解と援助:教師と親の関わり, 金子書房, 2004
- 37) 大河原美以:ちゃんと泣ける子にそだてよう 親には子どもの感情を育てる義務がある, 河出書房新社, 2006
- 38) 大河原美以:教育臨床の課題と脳科学研究の接点(1)—「感情制御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 61, 121-135, 2010
- 39) 大河原美以:教育臨床の課題と脳科学研究の接点(2)—感情制御の発達と母子の愛着システム不全—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 62, 215-229, 2011
- 40) 大河原美以・猪飼さやか・福泉敦子:母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の作成—因子妥当性と信頼性の検証—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 64, 163-169, 2013
- 41) Rosenberg, M.:Society and adolescent self-image, New Jersey: Princeton University Press, 1965
- 42) 坂井建男・久光正監修:ぜんぶわかる脳の事典, 成美堂出版, 2011
- 43) Stern, D. N.:The interpersonal world of the infant. Basic Books, New York, 1985. 小此木啓吾・丸田俊彦監訳:乳児の対人世界—理論編. 岩崎学術出版社, 東京, 1989
- 44) 高濱裕子・野澤祥子:歩行開始期における親の変化と子どもの変化(量的アプローチ), 氏家達夫・高濱裕子(編著), 親子関係の生涯発達心理学(第Ⅲ章), 風間書房, 2011
- 45) 竹沢純子:児童虐待の現状と子どものいる世帯を取り巻く社会経済的状況—公的統計及び先行研究に基づく考察—, 季刊・社会保障研究, 45 (4), 346-360, 2010
- 46) 田中昭夫:幼児を保育する母親の育児不安に関する研究, 乳幼児教育学研究, 6, 57-64, 1997
- 47) 立松照康:子ども虐待相談の現状と相談援助活動, 竹中哲夫・長谷川真人ら(編)子ども虐待と援助—児童福祉施設・児童相談所のとらきみ—(pp. 18-33), ミネルヴァ書房, 2002
- 48) 鶴飼奈津子:児童虐待の世代間伝達に関する一考察 過去の研究と今後の展望, 心理臨床学研究, 18 (4), 402-411, 2000
- 49) 内田良:児童虐待の発生件数をめぐるパラドクス, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 12, 269-277, 2009

- 50) van der Kolk, B. A., McFarlane, A. C. & Weisaeth, L. 編,
西澤哲監訳: ト라우マティック・ストレス—PTSDおよび
トラウマ反応の臨床と研究のすべて, 誠信書房, 2001
- 51) 渡辺久子: 母子臨床と世代間連鎖, 金剛出版, 2000
- 52) 渡辺友香・萱間真美・相模あゆみ・妹尾栄一・大原美和
子・徳永雅子: 首都圏一般人口における児童虐待の実態とそ
の要因, 日本社会精神医学会雑誌, 10 (3), 239-246, 2002

児童虐待の背景にある被害的認知と世代間連鎖

—— 実母からの負情動・身体感覚否定経験が子育て困難に及ぼす影響 ——

“Cognition of Being Victimized” and Intergenerational Chain Behind Child Abuse

—— Influence of Invalidation of Negative Emotion and Somatic Sensation by Mother on Difficulty of Child Rearing ——

會 田 理 沙*・大河原 美 以**

Risa AIDA, Mii OKAWARA

教育心理学講座

Abstract

The purpose of this study is to develop Questionnaire of Cognition of Being Victimized, and to investigate relation between “cognition of being victimized” and other factors. “Cognition of being victimized” is that mother regards her child’s behavior (crying, self-assertion, negativism) as aggression or blame to herself. Mothers whose children belong to Nursery schools in Tokyo (N=1160) completed questionnaires composed of Invalidated Negative Emotion and Somatic Sensation Questionnaire, Sense of Authenticity Scale, Child-rearing Anxiety Scale, Questionnaire of Cognition of Being Victimized, and Uncontrollable Child Scale. As a result, invalidation of somatic sensation by mother and child-rearing anxiety increase cognition of being victimized. Also, the vicious circle between low sense of authenticity(self-esteem), uncontrollable child, child-rearing anxiety, and cognition of being victimized was confirmed. Supporters have to break that circle, more specifically, to enhance mothers’ self-esteem.

Key words: child abuse, intergenerational chain, cognition of being victimized, child-rearing anxiety, affect regulation

Department of Educational Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本論では、児童虐待の世代間連鎖の背景にある「被害的認知」に関して調査研究を行った。被害的認知とは、泣きやまない、自己主張する、親の言うことを聞かないなどの乳幼児の様々な反応を、自分に対する攻撃・非難と捉える親の認知のことである。被害的認知質問紙を作成し、都内の保育園に子どもを預けている母親1160人を対象に、①負情動・身体感覚否定経験認識質問紙、②本来感尺度、③育児不安尺度、④被害的認知質問紙、⑤子ども統制不能感尺度から成る質問紙を実施した。その結果、被害的認知の発生や増幅には、実母からネガティブな身体感覚を否定された経験と育児不安の高さが関連していることが明らかになった。さらに自尊感情の低さ、統制不能感、育児不安、被害的認知の間には悪循環が確認され、支援の際には悪循環を断ち切るサポートを提供する必要性が明らかになり、そのためには、母の自尊感情を高めることが重要であると示唆された。

キーワード: 児童虐待, 世代間連鎖, 被害的認知, 育児不安, 感情制御

* Suginami Children and Family Support Center

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)